



杞園句集

坤





枇杷園句集卷之三

秋

初秋

この秋の川流よこてる小きこの川

拙堂

松の葉は落さる秋しるひとらうち
ちめくや秋半の竹のぬれ草
菴の戸へ捨ひ入るも相一葉

下

一

星夕

かも川や半れやらいつこる星夕
その川紅のすゝ多きよみと
水あひ平島もゆくこの川

舟行

一さ石に舟漕入きよて此川

灯籠

灯籠の油あゝるゝ復この舟

露

檀溪

露にちるあると誰住るれきよ茶の煙
素外は師々むらりの追福の目
をりふふれき思ひおる人々ハ
丹波のまゝは師葉津の

紀風草子

白雲ふんあつめきさるおもひら

いさつる

いさつるや孫ふすしきさ度の松
山よ花をさし稲妻をゆる海の上
舟よるし何らとてさす

稲妻あり凡つく庭の塘う那

秋風

あきしう路や舟よるし舟へゆくをす
秋風の吹をうししるを女奴の月

須之寺ハ戸をいさつるあきこのう路

悼松兄

あつましきう路りを師者の中といへ
はしきう此松兄ハ少ふそへる子の
よて年のよハいもいさるく老を推して
先づあつましきあつまするにうみ
なけまハ何らとてさす

秋風やちあもまのい おの路

朝旦

ひやくしやせき草のさく垣ねうま
朝さうぬあさい白ハ七
いくほよの世を世あめさの枝
蚊屋くしに草見ゆえ松の

萩

露萩やむすし控串る縄をこれ
のそくまてよのかく萩の夕の草

よきおとそ出留小も居ら萩芒

桂五亭

萩ふ志をれせふらこる西日外

萩

虹のぬやる音ゆく海の花の草
らふとて毛をゆくよの萩の草

女師花

をうらへしうやこもあふらうらうら

芒

雨ちよの秋おもあけり花をまきし
芒よるにおもひうすくをのすしちか
淋しさをあへてやあまのせきせぬ
雲さめのさやふ日のさくせうな

都みさの

は梅のすしさをかゑる雨花水

草花

まゝみちく日のさひし草花の草

稻花

湖のさくのひくさよ稲の花水

菴

明るおのあしきつらうきりくす
きりうしよしきりうしよのすれ

雁

丁無ふあきつに日のおる河原うあ
かきくまやくれきり一むつ田哉
十日即ち萩吹しきいて丁の考
一うひに鳥のすし一羽望田哉

三河の國榎堂を討ふ日

小舟に楫さして矢矧

川の下流ふあそふ

まの丁のおのうせいのふみくれや

七言絶句

雁く等たに色あやめ丁入へお道先の
一あそとられ健ふられ等たにわれ等に
与れ健ふられ一くすあよとられ
一ひとあさあめお中もあそにかり

鶉

わりあきそおきれきりひたる鶉は

鴨

考くれさるあしつる鴨もあつらふ

砧

小菟きあつた露のひりきあつれ

小松吹浮笑ひさあつたのよみ

芙蓉

月宵く芙蓉日くたを船の

月

宵くに来るものちれを月を友

須广行

ひち名雨の降

おくれをあやし

小菟たをくさる

あ人のあひ袖小もあつた月の

あしへゆきあつた

吹下すれ慥るも月の名孫

あーいよ

月さく雁の低し 浅路あり
燈さるるを覗きしあるとく 月夜式
ひやくし月おきある木宿るち
美代や山形くしきく月
松ヶ付形もや月よても者よなる
必月をいふかめてさき月夜哉
月見とて申けを 瑞しき小橋哉

十五日山行

おれ一人と回しつりしとあきふり
おもしろきものありしされは二日三日
の月形ころより例の人かきふりして
南陽の母の住る露もあ山の紫の菴を
とく 白雲跡をかくしつりあ
そももさきあふしとさきつりあふり
思ひしよりいとあふりてあきあき

わつりに一里晴嵐爰ををるありき
現に秋色よあけり入る木の梢に
月をまのぼしてふみの目おくれ初る
ことばに嬌しく覺ゆる

松や多きを松よあてて月見うき

雨の日信濃よゆく人をきく

映控を雨よの知りぬらぬ月

雨晴山月高

海山を洗ひ河けする月お戎

中秋あ一夕を月を伴ひて

十五おハ雨にゆく降風木ををる

たより吹あはさすれを揚す

降あめをちりあけりつるお月

秋のおきぬても志はし一月お戎

白園亭

古きや老の寐さめにある月

真地亭

おもむきし月此侍をる菴う那

山室に宿る月のけしきおもひ
ふれをそやくも麻寸らむおもひ
こゝろの朝あうく来さるあうく
いふ可待やあふれやあうく
うらみ終ふそおもをあうくぬ

水あけても

花を月

ちかきうのちり

画賛

海をを寄ふ即ちけの縁も月おひ

贈伯先四十賀

千代の坂路の即ちよの雪もあふれ
月の小えりあふれよの

おもひし年よるひとよ月の秋

とるりよひむしる夢むる月のせき

硯静亭

いさよひや月ふたりゆく萩の夢

八月十日 瓢合堂

了りきしきり

十六おの町にぬれしきり 瓢合堂

井戸田ふきり

いさよひもるきり月見るをむらひ

十三夜

梅いろみ田まゝの人も月見うさ

三河紀行

かき也上人はあつるもてと葉も世人は引

ちえらるおはしりしきりわら住みひ

なる山の甘庵のさけしきりさきり都み

四糸う辻に菰むしり引きしきり住

まけりそは行徳を積りしきりてみよの

下

上

出とよこそあをれ笑くか〜け
あ〜無癡の影よをそおもひ〜へき
わさふもあ〜す山にそひ山よそひるの
を流〜う〜もや少〜三河の國よあゆ〜
ふ〜事するひと〜をか〜ひおてそこ
能大樹寺少〜いふ此寺にまうつ時九月
十二日ありうやと又巖の山よ少〜いふやと
あ〜清浄迷宋少〜〜さう〜大寺かの

底よハ水亭を湛へ白雲の頂よハ秋の
色を〜とあ〜とあり〜と〜とあられハ
と〜と〜と山石根のあ〜う〜けらあを
さぬ〜ぬ
名をぬ〜月ちぬ〜こそ海の人

秋歌

秋のあや響よりけ〜る後一面

秋のおれありさむを思ひけしけり
書あるに葉十ひよきそらみとひ
よきあゆりあゆみ心やあしし
うちあしこもあしをうそくあられ
こち古へ人のひふるし事さる古言のこそ
あゆるし事さしやまじきし
くさるかほらひ事なえはくそ
西行をせびのあとと申りうり

あしをあすし作らむ朽木は
朽木はあしよしあつさうら思ひ人よ
よこ木うけあしら山の果もも鹿の
あすみしとは誰人をおもふ
あしをんをひさちうへさゆか
さしあふふおのし
秋のおき
おのあふふ

秋雨

秋聲う菴を

住ちりしとさとしそよふれ秋のる

こころもう浦を

秋のあめしとるく日ハ入ぬ

彼岸

秋のうらたに豆よくひらんうま

秋山

枯るうらしま松こそそよ色秋の山

秋水

知る野に毛赤るも深よあきみあり

鹿

鹿をさる書あふしと啼おもあふん

うめハけも十中一ゆけハ鹿のきり

吉野の山雪江う菴をあるひも

門半して手伸くひとも解し鹿のきり

秋葉山の麓和国の屋敷

いふふにいふふに

啼之鹿のあきよると深き柵り
明景さうらな——くも鹿の

い菊

きつきの山路のすれぬもあつれく
むしてまた少の老らぬさくは花

送花叔帰故郷

父母を見る多し——さきさき菊の花

訪草菴

いふやふし——菊もつくぬ庵の度
白き花の——らさきあり——うさきさき
花ふらに菊もあつ寸ハきき

お中九日

望山人尔一枝くぬよきくみ

あき

うらやまのあき 山よあき ーくあき

秋暮

あきあき 山のさよあきのくれ
よい月うあきすすそ秋のくれ

大蕨亭

日のくれぬ日ハあけれとも秋のくれ

桑山子

あきーあきひんあきりきりあき

無題

あきあきの十ころり枯枝うあ
稲まくや山や田よあきうあき
片あきあきうあきーあきあきうあ
あきあきあきあきあきあきあき

悼如東贈帯梅

あきあきあきの人のあきあきあき

八月八日の日持行上人をこの國へ来るを
まよとそひしめくやそ四十九院と云ふ
やまにたもまふ連の内をうかへて後院へ
おとろふしきものれ縁の上をよすこといと
難勝よそ申し〜く〜る

おとろふしきあきや持行の縁のま

東次子あて

何をし〜まひと〜く〜す〜次之の状

九月十日のまきとらぬ

智玉少〜ふ〜ふ〜

月少〜日〜み〜る〜に〜

あ〜あ〜の〜

卓地輯

枇杷園句集卷之四

冬

時雨

をり時るむさうりすむみあといちよ
写海より——くしるあつむの鞋の底

行葉軒

さへ舟にさるやしく雪降——くしるが
独居や古人うやうの小おしとれ

芭蕉忌

世にふるはさふ月をせ切の何る死

素堂、蕉翁の善友なり一日風農
をや成の破れやなく霜の荷葉のうそ
を悲しみ世の形見草うまとして甲子
吟行を謡しと曰おあるおもむきの
秋志金のちた似るうその牡丹あつさるハ

隠士の句ちれハちりやうまこそあある
趣を弄しその手向草と云

月時雨さりとてハ

古きけーさうな

一やしにおきーられると須戸明石
山菜花の手をうけおれと時るる也

茶室迎友

空みいみあるやーらねの松のうけ

おしるに小鏡焼たる白ひら

東門公子と申なる公子ありしま
雪塚のゆきもとに物くらしとて
あまこつと中に一人ひとりも
に下さる此士文子琵琶の上
あんなあやとあることありに
家の子ありちり比ありあに

いふ琵琶造りとかしるまの
そらちのちのちのちのちのち
はと花ありおのちのちのち
おちりりりちのちのちのち
として四行うまのちのちのち
嘈こ切ことおきをまのちのち
あちれみしるの時雨も月も
たこひぬ

時雨来るうらうらきつらむの電光の上
かる夜のあるまはふこそ世の傍り
あふとまの比留にふくまのしをまをつらぬ

落家

落葉せく朝のまの風おをささるま
あさくや落葉捨てす屋根のへ

不破の関より

ちおふあけそこの鼻はく落葉あふ

大和の國を行終りと畝火のやぶを
いほこ耳をし山をとりしをまを
あましくゆのあまに推夫のまを
叫けまのうくまのまのうく
まのまをひまをまを
しまをまを

け人も耳をし山を落葉捨て

木枯

木々〜〜やうかいにぬへる油の野

梅写る

ち〜〜と日もと〜〜の苔の上
木々〜〜や日ふ〜〜ぬる奥のし〜
木々〜〜や梅一た〜よある月

網代守

守治よ妻あると〜〜る〜〜る思ひ

千多

昔海に帆取に袖のう〜〜
柿さや〜のうちみも〜し〜

五道亭

鷺野うちけを枯ら草を死
大はふて

湖を野て野事

おあけうな

冬月

あくるましも余よあくるまの月
さるまじくや苔ふむきの月夜哉
さほくや雪あくるまやきの月

大魚追悼

ほハ入あうるそハふよかれ尾甚

枯瓿

あつしし住やうんせしとらる

詩仙堂帰路

丈山のささもくれゆく枯瓿

訪野菴

かれくやせまたにお向ふ庵の大

妻阿う菴を訪ひて

これ見よや霜の田芥を菴の窓

巷尔かすらひ月よちきん夫妻の枕を

五百生の者解少しゆしあうら一夜の露少
きえぬるそちうあさすうあも此悲ひ
よきことその中たしをしきみより子
れ残れるあつし、まをへんて中とてハ
あゆめ少しゆふをりみいたうてをちる
あつしの美しさを見るうちせらるるは
又あつしとせめるものちうらや
山吹のうまや、あつし、まをへんて
松の心

朝沼のまをを眺むる窓に

甲く

雉も鳴り犬も寝おれ山を引

氷

勝山を舟さし下せハ藤舟列す
その日を見す風あつく雪さへ
障りもささるるを徹す

白浪のうけゆるハ氷る小さうら

下

北

冬木立

芭蕉翁百回志

十句巻阨

ちちこよるものせしむる冬木立

雪

まてたるれき山見しよるせ
ちちこよる人のれきるひの木立
雪やあゝ〜雪に埋れり

雪掃やいつあそへ来る情雀
さいつても雪ハ降ちると大山家
月雪やこよひも月ハ雪の内

念云

世ふちるありと念にさへるおもさへら

許事と云

あともなういふ麻さあめ友と許事と云
南無月夜も南無とちる許事と云

春暮

年の満きたる暮む少しをる日未あゆ
いふはるゆく夏に湖水あやと描り洞と
いふ藤竹をうち溪水をいふと其
上にあつ地塘尾を枯て雪のこくとく
鳥は鷗新沈きり水底は清し是より
路を西にとこしといふ苔路中くは度く
ホるるして民お適は見伸にさや年の

田意よとて草葉のうさり松葉乃采
やうのものなりきりきり

ゆくといふの廿九日も子の日う南

あはれといふ月の一日はきよめ三五
いふ暮雨蒼の大人はいさあをれて共に
子日きりいふ之行にあげ柳たぐれ
たか石といふ月雪少のさきりつ
おもはれも亦またにめらるる来りの一すれ

始終を木よよせしむるしとせしむ
心少く感あること

野秀亭

係もきや胎のくるる葎のうけ
ゆく少しめのこそりともせぬ山あは
三年もたや小松らと来る日市た
立ちまうきと我を見る

少し〜くれぬ木よよせしむるしとせしむ

花月一葉のあそびにうめの日も
既よりれまう少し〜もたや一瓢の
酒の残りをくまう成るは

瓢箪

少し〜くれぬ
瓢箪おさしむる

蕉雨輯

枇杷園句集卷之五

雜

倉澤

くふも見えくくくくく不考の山

より山馮月々四十の賀よ

より山翁まきいひとの飛うま

大虫の隈あき宵のよはひら那

任のひまのかりこさのそら

海人の子等の朝の于家にむれ本さの
以未捨ひあるきなるうぢさうの以さち
未少小いふれ昔をささしその歸り
さてあゝ——あゝよあゝ——とおとあゝ
写のまゝくあゝかあゝくくあゝあゝあゝあゝ
あゝくくあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

宵時中やうらむとこらりと和おの浦

大黒贄

慈よ寶貝よ四時うやうの子の日よ

多春園の桜見せさせあふとありさる
くうひ侍る泉石のやうハ中さる椋
木を植るあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
七日の日早き、桜ハあゝあゝあゝあゝあゝ

あはたしくおちしるしーくはたの上
漕舟のまじりたる象厚の三景色もおもひ
やられさるゝ花よ漕舟よ小き舟といは
ち侍れしとてようしこふも似たりと
あつしきさるゝ五文ふいふちりしとのたぬ
さくら木深きまにふいふしきり停雲
思ふやれ

朝上傳 雲窓を在 花深き

暮下停 雲窓を在 花深き

若津 晩を

東色三ふ百峰 晩雲中
出芙蓉芙蓉 白雪千秋色
入窓林照 古木

平曲會式

床頭置琵琶二面

彈中或弦断 則頭設一面

急以代之

曲中禁欲笑吸烟管步

唾壺必應有意凡曲調

者貴飲暢々々則說盡

心中せ限了

此多其勢こほやうに月の光

示らる

何のお時よりあやしくん勝のもともて連歌

あそをさしけるに山石まてる水のきりみ

ふよさつりさう白葉舟わたりをしく

おほせはしきうのちて所壺にまゐり枝を

お入すおさうりきるをしくめ給へりあひる

るりよこし

曲終不收撥更唱祝世之句

琴中助言

あそふきみ曲終了

撥を弦のちたもりむ

脱袴

把盃

洋峨在心形素已忘蕩然
山頽亦復不妨

瓢飲并序

形便とくしきりみつら不用の支を

中好く自然をそのむ瓢有あるぬ
の是に一口をひききく居然とくしきり
急有用物物やある赤人の草西行の
庵の落世う所芭蕉此ぬのちや雪教人
大師の凡そ芭蕉此ぬのちや雪教人
風雅の落思まきもみあし入られ
さくに便とくしきり瓢飲し
てえて曰わり自然をくしきりわり

自然を失へり海に〜て曰汝小炭を
めらハ何とらいそん曰寂し酒をこめら
何とらいそん曰躁し米をめらハ何とら
いそん曰おちちを又叱し〜て曰米をらて
汝何と自然をこら〜海を飄々然と
し〜の歌て曰

鷗く様を口まら〜る鷗

同し流の藻堂草 虚飄

鷗く様を口まら〜る鷗

同しちうれのぬる飄 虚飄

あふおちちや冬の海 虚飄

松兄輯

後

子樹乃... 一年... 自... 糸...

年... 風... 乃... 糸...

糸...

岳 輅

琵琶園社中撰集書目

尾張名古屋
東壁書房 永樂屋東四郎

唯芝集

此書を朱樹翁東方紀行の集をるに諸國より用板せりといふふありめり全都五冊と云

春鶯囀

全一冊

梅藏人

天老著

全一冊

法々華經

全一冊

三日月集

白圖撰
少汝補

全一冊

麻苧

全一冊

秋風餘情

椿堂撰

全一冊

鳶乃眼

全一冊

人來鳥

青川撰

全一冊

むし合

全一冊

玉垣集

孔阜撰

全一冊

續赫夜姫

全一冊

草枕

素磔撰

全一冊

瓢日記

全一冊

松の炭

蕉雨撰

全一冊

橋日記 卓池撰

全一冊 庵の犬

野雀 五道 大蘆

同輯 全二冊

とつとつ夜

也有老人述 狂文和歌多とあつひ

同後編 同上

全三冊

狂歌蓬ヶ嶋

三蔵樓大人撰 春興狂詠

全二冊

狂歌頭の絲

同上

全一冊

狂歌初日集

同右 狂詠南刀合の 高志をあらわす

全二冊

狂歌千歳集

同上 古今人 狂詠をあらわす

全二冊

狂歌初心抄二冊

唐老橋渺大人著 狂歌の多き多き

狂歌才蔵集

四季とらら 狂歌の多きと

全二冊

俳諧歳時記

著作堂先生撰 全部二冊

此は四季酒寄彩撰皆は神事佛會 古事古歌ふらとく裁す中甚洋

同夏たのむち 也有翁著 全一冊

同諸集訂誤

布碩翁著 全一冊

志みのすろ物語

宿屋飯盛大人著 全部二冊出来

此書は當世に好らるるおろしよ 佐淡のうらとく尤無あると云ふ

是又體ハ字活指逸物語の種文よりとらるる後入と云ふ 拙著俳文種文は予とけりよん甚替りしよと云ふを

北齋漫畫拾壹編

貳拾編より追日 出板奇画妙図の

翁は漫画十編を名づくに人備うらとく思へば是までハ 是より後ハ一人の習ひやいふを才とて出されうらとく人 是より後ハ師匠をくくくくくくくくくくくくくくくくくく 殊に奇画はせせせせせせせせせせせせせせせせせせせ 今十一編を貳拾編より別を寄るや筆力のけりやけり 其妙を名づくにけりは余の編と事くくくくくくくくくく 一々面白くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 草一今もこれ十編を法めりくくくくくくくくくくくく 妙くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 又もこれくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく 又もこれくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

